雪形を考える

米本　光徳

プロローグ

陽春の候、鹿島槍ヶ岳をめざす登山者は、時折ある一つの出会いを求めて、赤岩尾根の高千穂平に天幕を張る。目の前には鶴と獅子の姿がある。

アルプスの雪形はなあ、山神の化身
　　代掻き馬、鶴、鶏、僧、好々爺
　渓の雪解け水はなあ、夢の原液
ゴクリと飲めばなあ
　　もうすぐ蒼い桜の春がくる

山の紋章

コブシの花が咲き始める頃、松本から大糸線に乗り換えると、多くの登山者は座席を左手にとる。

やがて列車がゴトリと揺れると、春が一気に動き始める。すると車窓には、今まさに蒼空に向かって飛び立とうとする真っ白な蝶がうかびあがる。隣の常念岳にはこの山の語源となったとされる常念坊の姿があった。

安曇野の線路脇に咲き誇る菜の花の競演を眺めつつ仁科三湖を過ぎると、今度は爺ケ岳の稜線に種蒔きに勤しむ好々爺が現われた。北隣りの鹿島槍ヶ岳には鶴と獅子が、続いて五龍岳には武田菱が姿を見せた。この姿、一般的に雪形と呼ばれる。文学的表現をとって「雪絵」あるいは「山の紋章」と形容されることもある。

この雪の造形は、古来より農作業の指針とされた。今では日常の気象状況はリアルタイムで伝えられる。しかし、かつての農作業は自然の天候にまかせるしかなかった。その上、温暖な西日本の田植えの適期は比較的長いが、雪国は短い。それゆえ人々は季節のうつろいとともに微妙に変化するこの雪形に着目し、農耕のタイミングを的確に読み取ったのである。

その種類は、概ね人物、動物、植物、農耕器具、文字等に区分けされるが、形状は、雪解けの山肌が黒く残るネガタイプ、周りの雪が溶けて白く残ったポジタイプのものがある。

種蒔き爺と馬はその代表格だろう。種蒔き爺の場合、知るだけで北アルプスに５人いる。なかでも八十八夜の頃に現れる爺ケ岳の雪形は、苗代に種を蒔く時期を知らせる農耕暦の典型とされた。

しかし、種を蒔くのは子供でも娘でも婦人でもいいのに、決まって好々爺であるのは、当時、それだけ彼らが地域や家族生活の中で大きな存在であったことの証に違いない。

馬は白馬岳の稜線に現れるものが最も代表的である。白馬村を走る列車から正面に眺めるそのシロウマはかつて代馬と書き、田畑を耕す代掻き馬を意味した。その頭を頂に向け前足を上げて疾走する様子は、本物以上に逞しい。また、そばの小蓮華岳には愛らしい子馬がいる。余談だがこの「親子」ウマ、ネガタイプの黒馬である。

鶏と僧侶も名高い。前者はシロウマの北隣り、白馬乗鞍に現れる。それは千国街道（塩の道）、佐野坂周辺からはっきりと認められるものだが、詳しく見るならこの雪形、尾長鶏がピッタリとくる。

僧侶は常念岳の雪形とともにと富山県の宇奈月にある僧ケ岳がよく知られる。

伝承によると、四月初旬、僧の雪形が上下に別れている間は遅霜のおそれがあり、顔が鮮明になってくると待ちに待った田植えの時期の到来とされた。そして六月、やがて僧は背中に重い袋を担うようになるが、この袋はその年の米、麦の収穫高の指標になった。そして七月、山肌から僧が姿を消すと、子供の歓声が水辺に響いた。

この他にも比較的知られる雪形として、白馬鑓ケ岳に山の神を田の神として迎える花立岩、そして鶴首、双鶏（雷鳥の親子）や唐松岳の八方尾根に蕎麦まき爺がある。安曇野の大天井岳には麦の刈り入れ時の指標とされた仔犬の姿があった。

*

とはいえ雪形は北アルプスの専売特許ではない。中央アルプスにも多い。

木曽駒ヶ岳には種蒔き爺に見つめられて一頭の春駒が、そして新田次郎の小説「聖職の碑」で知られる将棋頭山（西駒ヶ岳）にも疾走する二頭の駒がいる。この雪形は駒ヶ岳の語源ともなった。そして遥か南駒ヶ岳には等間隔に並ぶ五人坊主の姿が見える。これにしても北アルプス同様、里人の生活や信仰心を反映している。

しかしながら伊那前岳に見る稗蒔き爺と宝剣岳の南に現れる娘の雪形は、さらにこの地方の風土や民俗を反映しているようで興味深い。

前者は名前が当時の庶民の生活をそのまま今に伝えるかっこうの例だろう。現代人は種蒔きと言えば当然のように「稲」を連想するが、この雪形、当時の人々が「稗」を食して

いたことを今に伝えている。また、この雪形は粟や大豆を蒔く時期の指標ともなった。北アルプス唐松岳の蕎麦蒔き爺にしても信州特産の蕎麦がそのネーミングの根拠となった。

次に後者は島田娘と呼ばれた。小粋に髪を結い上げたその姿は特に印象的である。

しかし、これを島田娘と呼んだ人々は、その雪形に収穫期の豊饒を夢見たというより、年頃の女性にあこがれたと考えた方が当を得ているようにも思える。ドレスをまとったその姿は、鹿鳴館時代の貴婦人にも見えるのだが、伊那谷の男衆は農作業の傍ら、その姿を自分の花嫁に重ね合わせたのかもしれない。そう考えると日だまりの稜線からなにやら田植え歌の一つも聞こえてきそうな気になる。

やがて季節が進むと、今度は宝剣岳の千畳敷に巨大な鷺が舞い降りる。南部では空木岳の由来となったウツギの雪形が谷を飾り、南駒ヶ岳には飛竜の雪形が姿を見せる。後者は後にヨウメイシュのシンボルマークとなった。越百山には牛天神も姿を見せる。

また、対岸の南アルプスに目を向けると、間の岳に島田娘と向き合うように鬼面が、そして赤石岳には五の字があった。この両者も農耕の指標とされるが、前者は季節が進むにつれて厳しい表情に変わっていくのが面白い。後者は小豆を蒔く適時を示した。

ここで信州の代表的な雪形を整理してみる。

地域	山岳	雪形
北ア	僧ヶ岳	僧侶
	白馬連峰	代掻き馬　仔馬　鶏　花立山　嫁岩
	唐松岳	鶴首　双鶏(雷鳥の親子)　手斧打ち　蕎麦蒔き爺　八の字
	五龍岳	御稜(武田菱・武田信玄の家紋)
	爺が岳・鹿島槍が岳	種蒔き爺　獅子　鶴
	大天井岳	仔犬
	常念岳　蝶が岳	常念坊　万能鍬　蝶(蛾のオオミズアオの説もある)
中ア	木曾駒ヶ岳・西駒ヶ岳・宝剣岳	駒　島田娘　稗蒔き爺　鷺
	空木岳・南駒ヶ岳・田切岳・	ウツギ　五人坊主　鬼面　飛龍　種蒔き権兵衛
	越百山	牛天神
南ア	間の岳	鬼面
	赤石岳	五の字
八ヶ岳	網笠山	昇り鯉、下り鯉
諏訪	霧ヶ峰(車山)	寝牛
北・中	浅間山	佐久鯉
東信濃	菅平高原・根子岳	十一の文字
	鉢伏山	雁

信州にはこの他にも、飯縄山、木曽の御嶽山、乗鞍岳の種蒔き爺、黒姫山の寝牛、妙高山の農牛をはじめとして農耕に関する数多くの例がある。別に佐久鯉の場合、この地方の

鯉の生産とのかかわりを象徴したと考えられる。

とはいえ、不思議な現象もある。同じアルプスでも南アルプスや八ヶ岳にはその大規模な山塊にもかかわらずあまり雪形が認められない。日本の最高峰、富士山に至っては農鳥や農男等が散見されるが、その数は極端に少ない。

北アルプスの槍ヶ岳や穂高連峰に雪形が見受けられないのは常念山脈に遮られて安曇野から望めないためであるが、南アルプスの場合にしても、その主脈は遥か人里から離れ人々の視野に入りにくかったことに起因する。しかし、八ヶ岳や富士山の場合、同じ信州という風土を背景とし、その上、広大な裾野を抱え、人々の視線も間近にありながらあまり「見あたらない」のはどうしたことだろう。

さらに北海道にも雪形があまり認められないのは、かつてこの地が稲作の限界点に位置したことと無関係ではない。また、本州との文化の違いも作用しているかもしれない。

しかし、もし雪形が認められたとするなら海上アルプスの利尻岳などその宝庫であったに違いない。最もこの場合、海の漁期を示す指標になる。実際、昭和30年代まではニシンの漁期を示す猫の雪形があったという。

雪形研究

ところで雪形の研究はいつ頃から始められたものなのだろうか。

一般的には写真家・田淵行男(1905年～1989年)の研究が知られる。

彼は高山蝶の研究家としても名高いが、『雪の紋章　雪形』(学習研究社)をまとめながら、雪形は信州よりむしろ東北地方に多いと気づいたという。

農業の指針という点とこの地方が名だたる日本の米所であることを結びつけて考えれば確かにその通りかもしれない。彼の本に収録されたその数を見ると、新潟県、長野県、青森県がベスト三となる。続いて山形、福島、岩手、秋田県、その分布はまさに日本の穀倉地帯と一致していた。

調べてみると確かに新潟県・飯豊連峰の杁差岳には、農耕具の杁を持つ農民の姿がくっきりと浮き上がり、上越、妙高連峰の神奈山には跳ね馬、六日町の八海山には豆蒔入道がある。東北の高山植物で名高い栗駒山には飛翔する天馬もある。人々は毎年くり返し現れるその姿を見て、農作業や山仕事、山菜採りを始める目安としていた。それに『図説雪形』(斉藤義信・高志書院)を開くと、生き物を形どった雪形だけでも兎、鷺、鯉、鯛、蟹、牛、馬、鶴、雁、蝸牛、狐、鼠、象、ヤモリ、鳩、鹿、羚羊、猿、烏、竜、亀、犬、蝙蝠があると紹介されている。その種類にしても他の地方より圧倒的に多い。雪国にはどこでもそこに生きる人々のふるさとの数だけ雪形があった。

とはいえ、すでに江戸時代、この雪形に着目した人物がいたことはあまり知られてはいない。三河出身の菅江真澄(1754年～1823年)である。彼は紀行作家の先駆けの一人として近年注目を浴び始めているが、東北から蝦夷までその足跡を残し、その生涯の半ばを北奥羽の地で過ごした。また、その途上、羚羊や熊の宝庫として知られる秋田県・太平山の登山も行っているが、彼の記録は、雪形にとどまらず、当時の東北の庶民文化をより深く知るための手がかりを数多く含んでいる。

彼は青森県、八甲田山の雪形について次のような記録を残している。

『この峰に種蒔く老翁、蟹このはさみ、牛の頭などという春の残雪が見える。雪もやや消えてゆき、苗代をまくころになると、山にたねまきおっことといって、残雪の人のたっている姿に見え、そしてかにこのはさみに見えるころ、田をかきならし、うしのくびに見えるころ、早苗をとって植える。農耕のそれぞれの季節、残雪がそれぞれのかたちであらわれる。そして雪は六月のなかばに、すっかり消えてゆく』＜菅江真澄『すみかの山』(楢家能山)＞

八甲田山は明治時代、青森第5連隊の大遭難で一躍有名になったが、冬は津軽海峡の雪が颪となって押し寄せるほど積雪の多いところである。その記述には、八甲田山の雪のキャンバスに、種蒔く老翁が姿を現せば苗代に種を蒔き、蟹のはさみが出れば代掻きに勤しみ、牛の頭を見て田植えの目安としたとあった。

次に岩木山には24もの雪形があるという。白狗(しろいぬ)、斑犬(まだらいぬ)、龍、植女(早乙女)、長鋤、鍬等である。

その雪形が雑葉集「錦木」(1807年)に「岩木山残雪図」として描かれている。

しかし、菅江真澄の研究家、室谷洋司氏は、長年の調査の結果、その図柄は津軽の各地で耳にした雪形を岩木山というキャンバスにバランスよく描いた想像画ではないかという仮説を紹介している。

だとしても、残雪図は、岩木山とこの地方の雪形が人々の生活にどれほど深くとけ込み、真澄自身もこの地方の民俗と雪形に強い関心をもっていたことを裏付けていることには変わりがない。いずれにしても、彼の著作は、遠く忘れ去られかけた雪国の数多くの雪形を連綿と今に伝えている。蛇足だが、真澄は別の機会に、富士山の雪形について、葛飾北斎の描いた絵の中に描かれた農男の雪形を紹介している。

雪形に見る祈りの背景

ところで古来、人々は森に分け入り生活の糧を得た。信州でも八ヶ岳山麓を中心に縄文時代より豊かな生活が営まれていた。

やがて時代が進むと稲作が伝播し、農耕生活が広がる。すると人々は、水田に豊かな水をもたらしてくれる山に神や仏が宿っているに違いないと考えるようになった。

その思いはやがて山の神・田の神への信仰へとつながっていく。春、山の神は里に降り田の神となって人々の生活を見守り、豊穣の秋、人々の幸福を見届けると、再び山へ還っていく。琵琶湖の南に位置する太神山(たなかみやま)など古来、山そのものが田の神であったことを現代にそのまま伝えている。

だとすると、人々が眺め続けた雪形には、単に農耕の指標としてというより「もっと深い思い」が込められていたように思えてならない。人々は、毎日、その身を削りながら里の田畑を潤していく雪形の姿に暦以上のものを感じていたのではなかったか。

ここでは信州と九州、東北の津軽の様子を対比させながら、雪形に内包された人々の思いを見つめてみたい。いずれの地域にもある共通点が見受けられるように思う。

＜信州＞

安曇野は、九州の海人、安曇族が開拓した。そしてそこにはおびただしい馬頭観音、双体道祖神、庚申塔、二十三夜塔、大黒天等の石像がある。なかでも穂高町には町全体に双体道祖神が集積している。

道祖神は知られるように道の神、村の境を護る神、魔を取り除く神、そしてその深層においては、夫婦和合、子孫繁栄、性神の意味合いをもつ。また、今ひとつ農作物の豊作を祈る作神としての性格も併せ持っていた。

彼らは現在も王朝風の衣冠束帯、十二単衣をまとい、柔和な微笑みを浮かべながら、訪れる人々を迎えている。その造立は高遠の石工が携わったとされるが、江戸時代の作となるものがほとんどである。

しかし、歴史を紐解くと、この造立の背景には、その微笑みとは裏腹に複雑な事情が見て取れた。過去、この土地は、西山の水が伏流水となり痩せて実りは少なかった。現在も「烏川」の地名が残るが、烏は「空州」を意味した。加えて江戸時代には苛烈な年貢の取り立てを背景に大規模な一揆も勃発した。

そんな時、もう頼るべきところをなくした人々は、自ら石像を立て、その姿に日々の安息を祈るしかなかった。道祖神に刻まれた男女の微笑みは、実は人々の貧しさの表象であり、その笑顔が豊かであればあるほど、人々の生活は深刻だったのである。

伊那谷の道祖神にしても、国学の影響を受けてか記紀神話の世界を彷彿とさせるモノや上下を鶴と亀に挟まれ不老長寿を物語るモノ、あるいは夫婦の絆を強く表現したものも見うけられるが、やはり、その根底には貧しさが見て取れる。

また、少し離れるが、浅間山麓から八ヶ岳周辺に展開する石像群にしてもその背景は同

じだろう。これらの地方も同時代、火山の噴火に悩まされた。白馬山麓に続く千国街道に観音菩薩や馬頭観音が林立しているのも、この道程の険難さが背景にある。この街道、別名、雪崩街道とも称された。馬頭観音は文字通り当時の運送手段の中核であった馬を供養するものであるが、近年、蒲原沢で発生した大崩落事故も、このルートの危険性を如実に物語っている。別に木曽谷、馬籠峠には牛頭観音もある。

＜宮崎・鹿児島＞

南国の宮崎県や鹿児島県にも信州の石像群に匹敵するほど数多くの田の神が鎮座している。これらは「タノカンサア」「タノカミドン」と呼ばれるが、田の神が石像として姿を留めているのは全国的にみても薩摩地方のみである。現在、えびの市では、田の神を町おこしの起爆剤として活用する動きが進み、末永地区にある田の神は市のシンボルとなっている。

九州の田の神も全国に散らばる田の神と同じく、冬は山の神となり、春は再び里に降りて田畑を護り、農作物の生長と豊穣をもたらす神である。鹿児島県では、かつて島津藩がこれを田畑を一望できる地点に配置した。

頭にシキを被り手にメシゲと茶碗をもちユーモラスな表情をしたこの神は「農民型」と称される。所持するメシゲは男性のシンボルを表しているものだが、立像や座像はもちろん、僧形をしたものがあるかと思えば、俵を担ぐもの、飯の盛られた椀をもつもの、イチモクサンに駆けだそうとするモノもある。実際のところ、ここまでくると田の神というより「人」神と呼ぶ方がいいかもしれない。人々は、春と秋、田の神に化粧を施し、当番の家に集まって田の神祭りを行い、田の神舞(タンカンメ)を舞う。

また、宮崎県では「神官型」と呼ばれる田の神が等しく霧島連山(韓国岳、高千穂峰等)を仰いで座している。その王朝風の風貌は安曇野や伊那谷に見る双体道祖神と共通する。『宮崎の田の神像』(青山幹雄著)によると、これらは江戸時代の霧島噴火と無縁ではないとされる。そこには室町時代以降、江戸時代を中心に1525年から1771年までの246年間に16回噴火があったと記されている。実に15年に一度の割合である。

その被害は北麓の小林、高原、高崎が最もひどかった。また、この地域はさらに古来より埋蔵文化財の調査において時代同定の基準とされる姶良火山の噴火をはじめとする数多くの噴火を経験している。シラス台地も火山灰の堆積の結果、形成された。

鹿児島、宮崎地方の田の神は、それらを背景として立てられたものであった。その総数について、前書には鹿児島県には1500基、宮崎県にも500基はあったのではないかと記されている。その分布状況は、道祖神に限れば穂高町を上まわる。また、その造像の時期にしても、安曇野の道祖神と重なる部分が多い。

＜東北＞

東北地方はどうか。

農民詩人宮沢賢治は「雨ニモマケズ、風ニモマケズ、雪ニモ夏ノ暑サニモマケズ、・・・ヒデリノトキハナミダヲナガシ、サムサノナツハオロオロアルキ・・・」と謳った。その後半部は冷害に見舞われた農民の失望と孤独を詠み込んだものに違いない。

実際、『日本の石仏（９）東北編』（国書刊行会・板橋英三編）を開くと石像は東北地方においても信州の穂高町のように一つの地域に密集はしていないものの全域に広く分布している。なかでも山形県天童市周辺域、福島県の会津若松市、白河市、須賀川市、二本松市周辺域、宮城県の多賀城市周辺域には多くの磨崖仏、供養塔、石神が分布している。また、福島県、山形県、岩手県には道祖神、山の神、田の神の姿も記されている。特に福島県伊達郡の田の神は九州のめしげを持つ田の神と同じ風貌をしていて、造像年も宝暦と紹介されている。このことは遠く離れて二つの地域の間に交流があったことを今に伝えているに違いない。

同書の「序」には大護八郎氏が東北地方の冷害についてふれ、それゆえ子安観音（十九夜・十九夜供養塔）が極めて多いと記し、続けて東北地方での子どもの成育が難しかったことをあらわしているように思われてならないとしている。このことはやはり宮沢賢治の作品の背景と共通するものがあることを伝えているに違いない。東北地方が夏の穀倉地帯となった歴史は、実のところまだまだ浅いのである。

＊

三つの地域の共通点は何か

一つ目は、これらの地域はいずれも山と里がほどよい角度で向き合う関係にあり、人々は、定点観測をするように、日々、当たり前に山々を仰ぎ見たということである。

実際、石像の密集する穂高町からは蝶が岳、常念岳を真正面に望むことができる。また大町からも爺ケ岳、鹿島槍ケ岳を、白馬村からも五龍岳、唐松岳、白馬三山をほどよい角度で仰ぐことができる。中央アルプス、八ヶ岳連峰の南面、また浅間山、そして津軽平野に聳える八甲田山、岩木山にしても同じである。遠く九州、霧島連峰の高千穂の峰、韓国岳にしても四方からこの山を見上げることができる。特に高千穂の峰は、東北の岩木山にも似て、独立峰のように山麓のどこからでも眺めることができた。

二つ目は三つの地域には等しく大自然の厳しい環境が立ちはだかっていた。痩せた大地、火山の爆発、冷害、干ばつ等々がそれである。

そしてその三つ目は為政者の苛烈な支配である。先の安曇野の一揆も貧困と厳しい年貢の取立が原因である。

古来、農民にとって農耕の始まりは、本当の意味で一年の始まりであった。山は生命の源であり、里を潤す田の神そのものであった。

だとするなら雪形を考える場合、特定の地域にその数が集中していることと、農耕を中心とした名称の多さは、人々の豊穣を祈る気持ちの底に、一方で人々が自然にそれだけ強い脅威を感じていたことを示している。人々の足もとにおびただしい石像があることもそのことを裏付けている。

神は自然に依拠し仏は文化に依拠すると言われるが、当時の人々にとって、日々の困窮を前にした時、神も仏も同じ同じ存在であった。

特に春は１年を決定づける意味で重要である。春の安定は秋の実りを形作る。それゆえ彼らは、空に春の兆しが訪れると、真っ先に雪形を見つめ、その変化に山の神を感じとったのではなかったか。彼らはその変容する姿に年の豊穣を祈るとともに、さらに日々の吉凶を占い、日常の安息を祈った、そんなふうに思える。

歴史に「もし」はないにしても、春、霧島連山の稜線に、一定期間、豊富な雪田が展開したとするならここにもさまざまな雪形が生まれたに違いない。

蝶のゆくえ

雪形は現代の人々が仰ぎ見る以上に、より深い意味合いをもってその土地の歴史と風土、過去の人々の心を映し出している。長い冬を越えてこの姿を待ちこがれた当時の人々にとってはそれはまさに春の申し子であった。

しかし、そんな雪形も、近年、地球温暖化の影響が進み、あるいは開発の手が奥山までのびるにしたがって、その「棲み家」を失うものも出てきた。そしてそこに現代の農業の機械化と品種改良が追い打ちをかける。人々は雪形に頼らなくても順調に農業を続けることができるようになった。

だとするならこのままでは近い将来、雪形は、幻の文化遺産となってしまうかもしれない。今日まで人々の生活を支える指標となった蝶も鶴も馬も、そして種蒔き好々爺も、いつしか忘れ去られ、春の淡雪のようにその姿を消してしまう。

それ故だろう。昨今、長野県では雪形を貴重な民俗文化の一つとして確かに引き継いでいこうとする機運が高まっている。穂高町の道祖神や九州の田の神のように、この雪形を新たに地域の財産として見直し、「季節限定」の観光資源として、町の活性化に役立てようとするものである。また、豊科町の田淵行男記念館では毎年、「雪形探訪」の体験講座が開催され、年々参加者も増えている。それにまた、自然観察や郷土理解を視点に学校教育に役立てる動きもある。国際雪氷学会の講演会も全国で継続的に行われるようになった。

一方、まったく別の角度からこの雪形を見つめ直す動きもある。

一つは、雪形に科学的視点を当てその形と変化を分析することによって昔の氷河期の地形や気候を研究しようとするものである。同時にその試みは、現代においても年間の基盤水量を判断することにも役立つ。

二つは、先の観光資源としての活用をされに推し進め「ブレーメンの音楽隊」に代表されるような「ニュー雪形」や「私だけの雪形」を再発見しようとするものである。

しかし、それはそれで新たな視点として面白い試みではあるが、留意しなければならな点も多い。新たに「発見」された雪形と古来から生き続けてきた雪形を明確に区別しておく必要がある。ニュー雪形は、よほど注意してかからないと、その土地の歴史的風土や民俗をも混乱させることにつながりかねない。ある年の五月、代掻き馬の説明をすると、学生は「ロールシャッハの心理テストみたい」と笑った。残念ながらその感想には、この地方の風土に思いを馳せようとする気持ちを感じ取ることはできなかった。

エピローグ

雪形、日本特有のものである。外国ではほとんど例を見ない、

古来、人々は、自然の中に季節の「図柄」を見取り、それを軸に自らの生活を組み立てた。その力は、星を見て方角を読みとり、星座を楽しむ心とともに、人々がもちあわせた人間の豊かな想像力の結実に違いない。そして彼らはそこに山の神、田の神の存在を重ね合わせ、祈りの世界を創出した。

しかし、その祈りを支配していたのは自然の脅威とそれに伴う困窮だった。春、人々が一年の安寧と豊穣を山の神々に祈り、秋、再び祝いの宴をもって田の神に感謝の意を捧げるのも、それ故に違いない。

そして今、雪形は、農業の指標から、地球温暖化の問題と相まって地球の未来を映し出す指標となろうとしている。

しかし、一方でこんなふうにも思う。新潟県、日倉山には安曇野の双体道祖神を想わせる「爺(じさ)雪・婆(ばさ)雪」が仲睦まじくある。この姿と向き合うとき、雪形にはこれまで見てきた自然への脅威や、環境問題とは別に、その時代、その時代の人々の優しさや温かな結びつき、また自然へのあこがれも深く込められていると捉えたい。

それとも雪形は、山の神、田の神が、厳しい冬に耐えた庶民に対して、夢や希望を抱かせるために描き与えた動画なのだろうか・・。娯楽の少ない時代、雪形をさまざまな人物や動物に例えながらその変化を眺めることは、人々にとってささやかな楽しみであったのかもしれない。

高千穂平はやがて夕刻を迎える。天幕の裾をあげ岩壁を仰ぐと、南峰のダイレクト尾根に棲む鶴は、残照を惜しむように背伸びをしている。右手の吊尾根に棲む獅子は、逆に空から一気に駆け下るようだ。

かつて鹿島槍ヶ岳はこの二つの「山の紋章」から獅子岳、鶴岳と呼ばれた。同じ岩壁で交差する『動』と『静』、それはこの地方の冬の荒々しさと春を待ちわびる人々の心を象徴しているように思える。アルプスの春は雪形から・・。

（よねもと・みつのり＝城陽市立久津川小学校教頭）

参考文献

田淵行男『山の紋章　雪形』（学習研究社）
近田信敬『信州　雪形ウオッチング』（信濃毎日新聞社）
青山幹雄『宮崎の田の神像』（鉱脈社）
庚申懇話会『石仏を歩く』（JTB）
斉藤義信『図説雪形』（高志書院）
道祖神を歩く会 野中昭夫『道祖神散歩』（新潮社）
板橋英三『日本の石仏（９）東北編』（国書刊行会）